

御槌代木を伐り出す

皇祖・天照大御神をお祀りする伊勢の神宮では、20年に一度、御社殿と御装束神宝を新たにしてお遷りいただき、神威のより一層の高まりを願う至高の祭典「神宮式年遷宮」が斎行されている。第63回神宮式年遷宮は、大御神を新宮にお遷しする「遷御」を令和15年に控え、これに先立つ諸祭が令和7年5月より開始されている。御神体をお納めする御器の御料木である「御槌代木」を伐り出す「御杣始祭」など、同月から翌月にかけて行われたお祭りの模様をお伝えする。

撮影／阪本博文、阪本尚生 取材・文／中尾千穂（本誌）

前回の神宮式年遷宮では、9年をかけて33の主要な祭典・行事が行われた。それらのお祭りは、順を追って、御用材にかかわるもの、ご造営にかかわるもの、神遷しにかかわるものの3つに大別される。御用材にかかわるお祭りは「山作」、ご造営にかかわるお祭りは「庭作」とも呼ばれている。

第63回神宮式年遷宮のお祭りは、令和7年5月2日に皇大神宮（内宮）・豊受大神宮（外宮）にて行われた「山口祭」から開始された。その後も同月から6月にかけて、さまざまな御用材にかかわるお祭りが行われた。そのうち山口祭、木本祭の日は、天皇陛下の御治定（お定めいただくこと）により定められた。

神宮式年造管庁と物忌による奉仕

山口祭は、「御杣山」から御用材を伐り出すにあたり「山口に坐す大神等」を

祀るお祭りだ。「杣」とは「材木を採る山」や「材木」、また「樵」を意味する。御杣山とは、遷宮の御用材を伐り出す山のことである。

祭典当日の5月2日は、朝から雨模様。内宮の神域は濡れた新緑が鮮やかで、視線を遠くに向ければ、宮域の神路山・鳥路山から霽が立ちのぼっている。

午前8時、祭儀の始まりを告げる報鼓が打たれた。雨音に玉砂利を踏む音が混じり、第二鳥居で修祓を済ませた奉仕員が御正宮へ向かって参進した。奉仕員は、神宮式年造管庁総裁、技術総監、参事、技監をはじめ職員、少宮司以下神職、宮大工の「小工」と「忌鍛冶」の総勢70余名だ。神宮式年造管庁（以下、造管庁）は遷宮の準備を担う組織で、今回の遷宮に向けて令和7年1月1日に神宮司庁内に発足し、神宮大宮司が総裁を務め

る。造管庁職員と神職は袍・単・袴ともに純白の「斎服」を着て冠を被り、浅沓を履く。小工と忌鍛冶は、青色に⑤の五つ紋が染め抜かれた「素襖」に「掛明衣」と称する白布を襷掛けにして侍烏帽子を被り、草鞋を履く。雨儀のため、一同は白い和傘を差している。

そのなかに、正面を見据えて一心に歩を運ぶ小さな「物忌」の姿もある。物忌とは、神様に仕えるために心身を清浄に保った童女・童男のこと。かつて神宮には大御神をはじめ神々に奉仕する「物忌」の役が置かれ、内宮では童女・童男、外宮では童女がこれを務め、補佐役の「物忌父」を成人男子が務めた。現在も恒例祭典の神田下種祭（「皇室」104号参照）や遷宮諸祭の特別なお祭りでは、物忌が神宮の神職の子女から選ばれ、前日から齋館で父とともにお籠もりをして

奉仕する。童女は翡翠色と紫の「栢」と呼ばれる装束に紫の袴を着け、額に清浄のしるしである麻の「木綿鬘」を結ぶ。童男は白地に紫で唐草文が表された「半尻」と呼ばれる装束姿だ。両者とも和傘を差しかけられ、彩り豊かな飾り紐と造花があしらわれた檜扇を手に行っている。

御正宮に進み、外玉垣内の「中重」で拝礼した一同は、次いで荒祭宮遙拝所に進み、第一別宮の荒祭宮を遙拝。その後、神職と物忌、造管庁職員の30余名は五丈殿に入り、「饗膳の儀」に臨んだ。ご造営の事始めの祝儀である饗膳の儀は、かつて式年遷宮の諸準備のため朝廷から派遣された「造管使」を、神宮側がもてなした古儀を伝えるもの。造管使の役割は、明治以降は内務省内の造神宮使庁、戦後は造管庁に移り、神宮職員がその任に当たっている。

令和7年6月3日に長野県上松町(あげまつまち)の祭場で行われた御杣始祭で、外宮(げくう)の御樋代木(みひしろぎ)の御料木が伐倒される瞬間。手前の伐り株は先に伐倒された内宮(ないくう)の御料木。

